令和5年度　府立清明高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

学校経営方針（中期経営計画）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
「自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人」を育成する。 そのために、 1　生徒に自信を返す。 2　安心して失敗できる環境づくりを推進する。 3 「教え込む教育」から「引き出す教育」への転換を図る。	1　AI型学習アプリを用いた自学自習型の学び直し「フレスタ」や多面的・総合的な評価の導入により生徒の学習意欲が高まった。今後は生徒が主体性を発揮し、学ぶ楽しさを実感できるためのさらなる工夫が求められる。 2　希望・選択・ボランティア制の導入やプチイベントの実施等により学校生活への積極的な参画が見られた。今後も主体的・協働的な活動や社会参画の機会の充実を図ることが望ましい。 3　生徒情報の一元化や潜在的ニーズの把握等により、学習者起点による学校の魅力化が進んだ。 4　校内体制の確立により、個々の生徒に応じた指導の充実を図ることができた。今後もあらゆる教育活動のユニバーサルデザイン化に向け、外部連携や校内研修をより発展的に推進していくことが求められる。 5　持続可能な教育活動を実現するため、長時間労働の解消はもとより、「働きやすさ」や「働きがい」を感じつつ、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりが求められる。	1 「学ぶ楽しさ」を提供するため、指導と評価の工夫改善や授業のデジタルトランスフォーメーションのための研究・実践を行う。 2　サードプレイス（家庭でも学校でもない場所）の活用と探究活動の導入を進め、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。 3 「生徒をリスペクトする」という信念を共有し、内外の評価を活用しつつ、学習者起点による学校の魅力化を図る。 4　教育活動のユニバーサルデザイン化に向けた本校ならではの手法を研究・実践する。 5　ダイバーシティとワークライフバランスに係る取組を進める。

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
組織・運営	学校の魅力化を図る校内組織の配置と開催	教科・分掌横断的な会議を新たに設定し、教員の主体的・協働的な取組や提案により、新規事業の立ち上げやティーチャーズバイブルの作成、校内規定の見直し等を行う。	A	A	B	シン・会議メンバーの主体的・協働的な活動により、ティーチャーズバイブル実践編・資料編の作成、内規の改訂、教育環境の整備、働き方改革、周年行事の準備等が進んだ。次年度以降へのスムーズな接続が課題である。
	持続可能な教育活動の実現	教職員の情報共有や研修のデジタル化・オンデマンド化を推進し、教職員の力量の向上とワークライフバランスの向上との両立を図る。	B	B		教職員の情報共有が前年度以上に進んだ。また、時間外勤務の総時間数が縮減され、ワークライフバランスの向上につながった。ただし、研修のデジタル化・オンデマンド化はティーチャーズバイブル資料編の充実とともに、次年度以降の課題である。
学習支援	指導と評価の一体化	毎時間の授業において生徒を総合的に評価し生徒へフィードバックすることと、授業のあり方を改善し続けることができるようにする。	B	B	B	教職員研修等の機会も活用し、「引き出す教育」への転換について、学校全体としては大きく前進した。今後も学校教育全ての面で改善が進むよう工夫する。 学習評価のフィードバックについては、より生徒に伝わりやすい仕組みを構築する必要がある。
		教職員が生徒を尊重した「学習者起点」に立つことを前提として、「教え込む授業」から「引き出す授業」への転換を図る。	B			
	個別最適な学びの推進	生徒を主体とした、生徒自身が方法や目標を選択できる授業を推進するために、公開授業週間や研修を通じてUDやDXをさらに進め、教育資源を有効に活用する。	B	B		公開授業週間や研究授業等を通じて、「個別最適な学び」につながるオンデマンドを活用した授業が定着してきた。今後も、より効果的な授業方法を研究し、個に応じた学習の推進に取り組む。 学習の課題や単元は、教科担当が用意したものが中心となっており、今後は生徒の「長所の伸長」を図ることができるよう、生徒が主体的に学習内容と方法を選択できるような仕組みを提案する必要がある。
		「できることをもっとできるようにする」長所の伸長や、「できるようになりたいこと」に生徒が主体的に学習し成長できるよう、個に応じた学習を推進させる。	C			

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
生徒支援	学校生活におけるソフト・ハード両面でのユニバーサルデザイン化の推進	生徒指導におけるティーチャーズバイブルを作成・共有し、全教職員が共通理解して生徒の成長を促す生徒指導や生徒をリスペクトした生徒指導を行えるようにする。	C	B	B	生徒指導研修やいじめ対応研修において、本校の生徒指導のあり方の共通理解を図った。ティーチャーズバイブル（実践編・資料編）へも反映させていく。 ワーキンググループでは生徒主体のイベント開催やチルスペース（一人ひとりが落ち着ける場所）の整備に取り組み、すべての生徒が安心して過ごせる学校づくりを推進することができた。
		ワーキンググループや生徒会において、校則・ルールなどのソフト面や施設・設備面などのハード面の課題について議論・検討し、あらゆる生徒が過ごしやすい学校づくりを進める。	A			
	個々の生徒の特性を生かした活動や社会参画の場の充実	つばめ祭・つばめ杯などの各種行事において、生徒が自己の特性を生かして主体的・協働的に取り組むことができるよう活動内容の充実を図る。	A	B		つばめ祭では地域コラボの取り組みを充実させ、つばめ杯では従来の多様な種目に加え保育活動を追加するなど、生徒が個々の特性を生かして主体的に活動できる場を増やすことができた。 生徒の社会参画の機会を創るために、「未来へのとびら」（情報提供だより）の定期発行を開始することができた。また、校外のルールメイキングに係るイベントへ参加させることができた。
		生徒が自己の可能性に気づくきっかけとなるよう、外部と連携したプチイベントやボランティア活動など社会参画の機会を創る。	B			
進路支援	キャリア教育の充実	LHR進路学習での計画的・系統的な進路ガイダンスの実施を通じて、キャリア教育の充実を図る。	B	B	B	外部人材も活用しながら、年間を通じて進路ガイダンスを計画的に実施できた。特に分野別模擬授業では、興味のあるテーマの授業に参加することを通じて、進路意識を高めることができた、社会参画の機会として、インターンシップ、ボランティア活動、大学通信課程受講、幼稚園教諭・保育士・看護の体験等を準備した。参加生徒には貴重な経験となった。受け入れ事業所を確保し生徒及び保護者のニーズに応じた事業所を選定することが課題である。
		社会的・職業的自立に向け、インターンシップやボランティア活動、高大連携など、外部機関と連携を行い、生徒の主体的な社会参画の機会を増やす。	B			
	個別最適化とダイバーシティに係る取組の推進	個々の生徒のニーズに応じた進学や就職に向けての支援を充実する。	B	B		ハローワークや、職業訓練校との連携を通じて、生徒及び保護者のニーズをもとにした支援の引継を行うことができた。進路情報コーナーを拡張して、模擬試験や大学・専門学校のオープンキャンパスの案内など進学情報を提供することができた。生徒の希望進路にあわせた情報の内容を選定し、適切に情報提供することが課題である。
		進路情報を生徒に適切に提供し、生徒自ら進路実現に向けて選択し実行することができる機会を設定する。	B			
教育相談	特別支援教育の充実	生徒のニーズや特性に応じた通級指導「みらい＋」のカリキュラムを作成する。	B	B	B	生徒対象のアンケートを自立活動の区分別に刷新し、生徒のニーズや特性に応じたカリキュラムを作成しやすいものに改定し、支援計画を作成した。今後はカリキュラムの完成が課題である。
	生徒理解力・コミュニケーション力の向上	他者を尊重するコミュニケーションのあり方や手法について、研究・実践する。	B			合理的配慮に係わる合意形成や教育相談場面において、関係教職員の連携を密にし、SC等の助言を得ながら実践した。今後は、ティーチャーズバイブル（実践編・資料編）を活用し、教員の共通知識としていくことが必要である。
総務企画	広報活動の充実	生徒主体のオープンキャンパスや生徒リポーターによるTwitter活用等、生徒の主体性を重視し、清明高校の魅力を生徒目線で発信する広報活動の充実を図る。	A	B	B	説明会、オープンキャンパス、個別相談会の開催に当たっては多くの参加者が来校した。生徒主体の開催方法やSNSによる情報発信も好評であった。今後も運営方法をより工夫改善していく。オンデマンド動画での学校説明や360° 施設紹介などを継続実施した。次年度はドローンを使用した学校紹介等、さらに多様な広報活動を実施する。
		より身近で効果的に清明高校を紹介するために、360° カメラやVR等の機器を効果的に使用し、YouTube配信やTwitter、学校説明のオンデマンド動画等の広報活動を企画、実践する。	C			
	ICTを利用した授業改革	ICTを用いたさらなる教育方法を研究・共有し、従来の授業形態を変容・再定義する「授業のデジタルトランスフォーメーション」を全教員が実践する。	B	B		個別最適化学習を目標にオンデマンド動画の作成研修を実施し、昨年度より多くの授業で実践できた。次年度は学習支援部と協議して全教員で実践できるよう研修や環境作りを進める必要がある。
	図書館の効果的な活用	生徒の探究学習や自主的な学びを支援するとともに、学校内でのサードプレイスとしての機能を高める。	B	B		来館者数、貸出冊数とも、昨年度より増加している。清明ワーキンググループ「学校空間と心の居場所について」のアンケートでは多くの生徒が「落ち着ける場所」「ストレスを感じない場所」として利用している様子がみえた。

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
F年次	自己肯定感や自己理解を高めさせる様々な学習に取り組む経験の提供	総合的な探究の時間や特別活動では、多様な生徒の実態を加味し、参加しやすい内容設定や取組方法を工夫する。	B	B	B	総合的な探究の時間の時間や特別活動において、生徒自身が取組の内容・進め方・参加方法等を選択できるように設定したことで、種々の取組で多くの生徒の積極的な参加・活動が見られた。できていることに注目し、意識的に生徒への肯定的評価を行った。様々な集団活動に対する不安を訴える生徒も複数いたが、取組を通じて自信につなげられた。一部では、集団活動の参加に消極的な生徒もおり、引き続き活動設定上の工夫を要する。
		取組の結果だけでなく、取り組んだ事実やプロセス、努力等に対する肯定的評価を意識的に行う。	B			
	多様性を理解し、自他の安心や安全を意識させる機会の充実	授業や特別活動等を通して、心身の健康や基本的生活習慣、他者に配慮したコミュニケーションやマナー等に関する事項を指導する。	B	B		他者理解や対人・社会性の育成、人権尊重につながる活動を特別活動に設定するとともに、日々の生徒の行動や発言等を捉まえて適宜指導した。また、保護者や教職員、関係諸機関等と連携し、情報共有や対応等を確認しながら、組織的に個々の生徒の実態に即した環境調整を図ることができた。ただし、対人面におけるトラブルや不安の訴えは一定数あるため、個に応じた効果的な指導の充実が求められる。
		学校における行動観察に加え、家庭や関係諸機関との連携による生徒の実態把握に努め、多くの生徒が安心して学べる環境を整える。	B			
M年次	学習・生活環境調整の充実	生徒のニーズを適切に受け取り、デバイスや校内システムの活用や外部機関と連携しながら、学習環境を整える。	B	A	B	学習環境を整えるため、デバイスや校内システムにより、迅速な情報共有ができた。生活環境を整えるため、保護者や外部機関との連携により、現状に即した対応ができた。他者と関わる機会を学校行事や総合的な探究の時間に多く設定することにより、F年次のときより相互理解を深めることができた。また安心して失敗できる環境作りを推進することができた。
		学校行事や総合的な探究の時間を通して、他者と関わる機会を設定することで、お互いを認め合う寛容な雰囲気を作り出す。	A			
	他者との関わりから自分の役割を見つける機会の提供	学校行事や総合的な探究の時間を通して、自分の興味関心に合わせた役割を担うことにより、長所の伸長を図り、自分の責任を果たす機会を提供する。	B	B		総合的な探究の時間では、進路学習と校外学習を掛け合わせ、生徒の関心のある府内の企業に見学及びインタビュー等を実施することができた。つばめ祭やMフェス（総合的な探究の時間の一取組）では、生徒自ら企画運営し、それぞれが役割を持ち、実施することができた。一方で、生徒が地域と関わる機会を提供できなかった。
		学校行事や総合的な探究の時間を通して、地域に関わることにより社会経験を重ねる機会を持ち、他者理解を深め、自分の役割を見つける機会とする。	C			
S年次	主体的・協働的な活動の充実	HR活動や総合的な探究の時間、学校行事等を通して自分の果たす役割について考えさせ、その役割を全う出来るように支援する。	B	B	B	生徒は複数入学年にまたがる集団の中で新しい人間関係を作ったり、新しい役割をそれぞれが担うことができた。また、学校行事では実行委員等に主体的・積極的に参加する生徒も多かった。次年度に卒業年次になる生徒が多いが、今後も失敗を恐れずにチャレンジをする姿勢を応援していく必要がある。
		自らの苦手なことに気づき、支援の要・不要を整理させ、従来は敬遠したような内容にも積極的に参加するよう促す。	B			
	社会参画の機会の充実	総合的な探究の時間を活用して社会と学校について考える機会を作る。学校行事でも地域との連携を通して社会参画について考える。	A	A		総合的な探究の時間を通して、「私たちにもできる社会貢献」について考え、活動した。生徒が設定したテーマは多様であり、様々な社会貢献活動について新たな発見があり、生徒が成長できる機会となった。 また担任団として働き方改革に創意工夫して取り組み、その姿を生徒に見せることもできた。
		ワークライフバランスの適正化を図り、大人が楽しく社会生活を送っている姿を見せることで、理想的な大人のロールモデルを生徒に示す。	B			
G年次	VUCA時代を生き抜く力の育成と、個々のライフプランに基づく進路選択の支援	様々な集団活動に主体的に取り組み、自己の適性に合った取組方法を試行錯誤させる中で社会で自分を生かす力を育成する。	B	B	B	学校祭で地域企業と連携したことや模擬店に挑戦したこと、総合的な探究の時間での社会貢献等を通して、学校以外の機関と関わる力を養い、主体的に活動する経験ができた。進路実現に向けては、4月当初の面談で生徒の方向性や困りごとを聞き取り、家庭や関係分掌、進路先、外部機関等と連携し個に応じた指導を進めることができた。
		各関係分掌や家庭、関係機関との連携や進路に関する個々に応じた情報提供を通じてきめ細やかな支援を行い、進路実現につなげる。	B			
	指導のユニバーサルデザイン化と個別支援による多様な生徒の学校生活の充実	多様な生徒が誰一人取り残されることなく学びの場に参加できるようにするために、本校のICT環境を最大限に生かした支援を行う。	B	B		多様な生徒に対応するため、ユニバーサルデザインを意識したSHR連絡やHR運営に努めた。学校行事や総合的な探究の時間等で、自分の得意分野を選択して活動できる場面を準備し、実践させることで生徒の自信につなげることができた。サポートを必要とする生徒には、関係機関と連携するとともに、卒業後の見通しを持たせることを意識して指導した。
		各関係分掌や家庭、関係機関と綿密に連携する中で、生徒の教育的ニーズに対応したサポートを行い、安心した学校生活を送ることができるようにする。	B			

<table>
<tr><th>領域</th><th>重点目標</th><th>具体的方策</th><th colspan="3">評価</th><th>成果と課題</th></tr>
<tr><td rowspan="4">事務部</td><td rowspan="2">生徒が学ぶ楽しさを実感し、また学校生活の中で、自信と社会的実践力を身に付けられるような教育環境の整備</td><td>教科・分掌と連携し、必要な教育環境を整備し、また時代に対応したICT機器の整備更新を行う。</td><td>B</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="4">B</td><td rowspan="2">各分掌、教科と連携しながら必要な整備を行った。次年度以降も各分掌教科と連携しながら計画的に必要な物品の整備に務める。
あらゆる生徒が安心して学校生活が送れるよう、清明ワーキンググループ及びシン・会議等と連携し、環境整備を行った。
就学支援金及びBYOD購入支援制度等の修学支援について、生徒への周知・相談等を丁寧に行い実施した。</td></tr>
<tr><td>生徒が安心して学校生活を送れるよう、就学支援金及びBYOD購入支援制度による支援を適切に実施する。</td><td>B</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ワークライフバランスを実践するための働きやすい職場環境整備の推進</td><td>教職員の業務負担を軽減できる方策を検討する。</td><td>B</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">業務軽減につながるよう、担当以外の業務についても情報共有し、お互いの進捗状況を把握し、繁忙期が異なる部内の業務について、補助できる体制作りをすすめた。
教職員が心身ともに健康で安心して職務に専念できる環境整備として、休養室のマット設置及び職員室カーペットの洗浄を実施した。</td></tr>
<tr><td>教職員がより働きやすい職場環境づくりを推進する。</td><td>B</td></tr>
</table>

（評価の基準　A：十分達成できた　B：ほぼ達成できた　C：あまり達成できなかった　D：ほとんど達成できなかった）

学校関係者評価委員会による評価	・生徒や保護者対象の「学校満足度アンケート」の結果と照らしても、年度当初の学校経営計画に沿って、十分成果を出せていると思われる。 ・生徒の主体的・協働的な取組を推進し、授業や学校行事、学習環境が改革・改善され、生徒がより安心して登校できている様子がみられる。 ・合理的配慮、通級指導、環境調整等、清明高校ならではの生徒への指導と配慮について工夫・改善が進んでいる。

次年度に向けた改善の方向性	・開校10年目を迎えるに当たって、さらなる工夫改善によって、本校の教育方針を実現するための取組を発展・推進させていく。 ・生徒たちが主体的に発信・参加できる教育活動を充実させるとともに、生徒の声を聞くことができる機会を大切にし、学習環境の調整を推進していく。 ・ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンのさらなる充実を図る。